



五
悉
一
具

全

中村俊定文庫
文庫 18
384



入巻一具序

天保六年

名浅草塔より負ひまきとて芳州へかゝりけり
しよりや日数もかゝりてあることと
玉川の館乃秋名あることと
兼も帰志訪れては厨より杖と雲を
九月より余りなることと
かつまのれ誰とて市中一の喧さ
河の急とてよを所へあることと
此位終へ



一室のこゝとて可もて惜く風聲はささめ
富者といはれり孝と徳ののみあは
河川乃東脩竹流るるなり乃水神は
ふれて固上吉農家連て鶴を折回し
鞍しそむとくに楢原の嶽も無り海
海門眸り深き坂乃松浦へ入ひて廣
陸井濤又多むやちの早稲の田面
はつり軍を群る斜に可もて南楚
と云れ難免もかく勝境すらく後和待也

佛塔をくるといふ一室のこゝとて可もて
世の中より世のこゝとて可もて
志しんく一具此又志く清浄の室一
日くむく一祖翁といはれり
故屋師を此傷あはと書きし
蕉門より不易の意あはとや
法信乃同より厚く
はいて一編の歌竹と書きし
向く書くといふ

持つて後身は世に選者とは序を
ともて一椀中の後身世界にやまの也

親楓主人述

寛曆辛巳秋七月



五器一具

屋敷の軒のついでに物置の壁に
藤原志の牛やりのものゝ垣ありあり
戸を以てらるゝ庭にさのつゝ
をこゝののさのさくは
あの特産のしを師とて見まは
師もまゝのさのさくは



層火ぬま菜汁のぬくまもいーあま
有海山横をーあま久能の海つる
空らた免早稲やたく稲の起あま風も
玉とくー空まの起るーそ尺一空路

菜路 述

筑のま田つても娘ーあ悉一具 蓼太
月も出向ふも川原の春 固竹
時及ふ言今の序傳を起す 金龜
娘けく私のおい高くとし兒
年もまや十日空路のま竹
城の月出さふ空路かやく 太

法橋もこを捨つまゝとてあり
 来ると胡の雁のきをむさがる
 紅朽葉麻子のくまを解ちり
 新地くのこぼる川きや
 まゝの四月の梨乃すほりさ
 雨のぬれ尾の粒を長巻
 福のときさせく姑よのきま
 本巻船の拂子一本
 兒 太 竹 児 太 竹 児

世の中の嘘識あきまを来とあせ
 雲よららゆる花もや
 月を交二日巻り旅もよむ
 夢切糸乃消と御
 子の物もよき悪くも懐く
 狐のいよのこゝろ物
 試みよの風美くはる神
 名はるはる家乃西
 児 太 竹 児 太 竹 児

とくくと針とる母のしる向
 志きく一撞乃空也寺り鳴る
 昼八目子尺くぬ四糸の川ちとる
 拾ふく脈の字川物布し
 名斗ハ志さいらくく刀振治
 裕志のまのせりく背戸の屋敷
 きくくと月の初お照るド
 出買の檐桶く難待歌
 六 竹 呪 危 竹 太 危 呪

糸不くくちりくくま程お基盤
 久しい鶴の庫裏をのさく
 そこは阿く山く川くつ晴向く
 先恙形くくいりく寺よりむ
 茨も花のけし飾の女悪一を
 着くくふ易乃さらく燃るる
 危 呪 竹 太 呪 危

梨花の雨と松の恨と梅棠を賦とちり
秋の暮るる海も何んか水ぬるる
若草の青きさるる月おのふつさる
その語海の花街のちのく物にかよふ琴の
音はいつしの内侍のまをりりと川舟の
あく終さるる海も何んか水ぬるる

菜踏屯

蘇とりのも牡丹の松や春の月 蓼太
柳の動く楼のとほり火 周竹
破刺貝のくま笑の波あそ 鐘山
裸の若くも男の子なり 子來
物中の歌んくそら掃ちり 竹
此と牡丹 乃ち此のさ心中 太

くはくはさの程来も徒依若
者のあつゝ小判のつゝ
合羽もかき唱戸の汐志免
松原の扱の銀向き
徳ととは下り酒の口あさき
垣あはれも先意乃関
ここ物瓢へ花の咲き
月尔来きくるも冷虫

来竹太山竹来山竹

八

角力のと熱海の利と保也
今又怪し経の法
世ハ花の出勢を降
田螺唱夜のくま町
小笛と角不之持の餅小も
を袴も後を合
作産生と竹篋ひ称る徳古
二穂も梅もを乃々

来太山竹来山竹

かゝらう心も喜まきけに野上の河しやうり
 筆ささしけろ女房のし離別る
 むし雨の日傘もそこまきれあう
 菴と青田の中ホ吹ぬく
 伏のなうかろつる長讀子
 手代ちのせのろろりんたすけ
 かゝるしと終極も月の病
 凡呂愛うしと紅葉のつ物

山 竹 来 太 竹 山 太 山 竹 来 竹

目のとくく比敷りけり又まきけり
 一ちみ位のぬろくもせけ
 かゝ番の栞り暇布約合せ
 浦山しハハの肖やし
 碧銅の水とくと花咲く
 空の自在のいとやふ陽光

山 来 太 竹 来 山

み夜の左何く

寒山詩 さるもの

ちとりのか 埋火

札 紙巾

紙衣

灯乃うあく時鳴ちとりのか 蓼太

寐是もさむき芦のをちの家 固竹

去字ぬ飛脚小紙かろせそ 吐月

却雨笠のり川々下る橋る 六渡

下階も竹棲る月の影かこ 竹

風流正も竹結の神己の 月

あ川のほとりよみかへる負軍
鷲の撞のともやくの園
とふくも爺よ乳の阿のあせ
園乃中より舞吹
晴阿の雲よ志の帆の雲おも
雪舟よと探はく
新持ぬ下戸の桂の友と
芋^ヤち^セに市乃通くさ
辰 月 午 辰 月 午 辰 月

戸縁をわたり呂徒橋の朽の
古い大工の口をくし
相居のおんをのあも
車と、旅く年の夕
新も又花のち柳の風阿
とちも^トち^チ山^シ乃^ノつ
辰 月 午 辰 月 午 辰 月

菜路菴瓢中吟

さー向ふ水音きき蓮の花耳得
 足すねのをつれ踏みしきま
 水くるそのかき涼し牛ま人 盃行
 物色や目まじく袖をかきり控
 色くよ目の暮かろ花ゆき
 凡と結まのよなきりし名柳 蓼珠
 道回つくあはれも静く飛りし 素白

雪解ける氷尺かきし木芽ト 左更
 雪解けや半ゆき尺結く二羽ふと
 隔ハや悟く梅の穂まかき 風枝
 葉あけしるつね風もぬふや葉の花 南江
 やしつとまのひらや初萌子 月湖
 葉一の花さきしと芽ふとぬきり 琴馬
 け比ハ麻の尾上や鐘のをる 昔我
 おなら夜の半し葉ゆふ柳の肌 氷壺

さし川 蟬や愛ひとつはまのなる 宗城
下 下物や風も旭もまはつさく 竹工
夏山 やさうらるる音とそとく見る 石造
風を待つとあはれは柳の肌 六賈
畠野や男よまきまかき連る 馬老
名月やあはれの新さかり、
ひとまのつと木まのつとや鴨の音 蘭府
くひかしの音して月の影舞り、

降ゆのと只果しと知る暑の分 蝶鳴
鳴もの下まつともけり初地 大耳
あ月雨を志まあつとや雲の帯、
君う代は是も戸さぬ田あが 蓼且
川猪やまゝんくさるる園 兩、
枝のあまものハ船ハ蓮の花 兀子
さめてうゝ音のまゝ帰はあが、
志し流し碎る音やまの帯 兩血

蟬の音とあけつて種のかたね
 若菜ふとふゆのあき葉つが
 枝のえくんも暑い蟬の音
 知れよとくあけつてはあけ
 向背や中へつてはあけつて
 能くも節句のちききあけつて
 葉の花や都はあけつて
 三厨子孫く七厨は涼し作人
 涓水

蟬の音や青き葉は初し
 音くは月もあけつてはあけつて
 虫や虫のとりしるあけつて
 今くけくうちのやけつてはあけつて
 凄宵や女のあけつてはあけつて
 かくるもあけつてはあけつて
 橋立や二葉すはあけつてはあけつて
 かくせもあけつてはあけつてはあけつて

杜十
 大賦
 千潮
 残馬
 千婦
 竹裏
 冬草
 羽仙

拾得

その筈見よ〜唇も眠り〜 乙呪

此四章と辛巳乃夏川柳のちり紙

葉添菴のちり紙〜セー〜吟と瓢箪

何〜〜そのちり紙〜〜るん

雪中菴瓢箪中吟

雪ももももあ〜〜菴瓢のこゝろ 及道子
草物やきのふと雪ふ鹿のつと千之子

大

青柳や雪より海邊〜川の音 金沙子

十九

空則のほ〜〜ゆり〜〜あ〜とけ 吏流

ホウキやその物〜のちも押〜〜ぬ〜 蓼把

松香のちり紙〜〜蘇美や高き此 楚水

か〜せ〜や赤紙〜〜ゆ〜〜氷の上 夷仙

道具屋の柔〜〜〜〜〜〜〜〜〜 音簾 物雲

お〜〜〜ハ〜〜具の柳〜〜〜中 這平

秋風や花をうらよかの初むしー 信夫
 曲ありや燈をさくく届く小さくつま 自来
 傾城の送るくしりり照の重 花上
 彩うつや花の中うら花の壺 六渡
 塙臨ふちきれく花や青の冒 如雷
 名月や風の如減き柳乃花 飛境
 いろうつや館管ふまくの時平村 棧石
 あり袖の二尺よりくぬ野菊は 芦一

系合ふし扇乃波のありきり 花取
 流るりや市約かえり門はくし 五全
 雅芝の内々麻る柳を水語は 岸後
 詩くくやしく巻く麻のあり 鬼也
 響の一字はましく初音の分 徳車
 物まやせりあくる山くつ 南羅
 夕鳥や清織る音の右りり 宜中
 夕鳥や物も夢より遠くや 枝貢

お梅や雨の中り亭ひとつ 野菊女
来りて雨の音は遠く旅籠より 仙衣
入るもくさるもかき野分と 兼言
お雨の跡はまきかき柳は 眠江
山もと影舞をふるや音あり 山奴
う川波の引くは音き柳は 眠我
お月雨や星も杉か 湯まゆる 音有
はくもひのさ月たはくもひ 雷堂

立琴の音かしの勝やその川 嵐亭
から酔くちく酔くつ 雑煮 白牛

書日音

名古屋

お花をさく送る日や雨の音風の音 南空
お梅の歌をえちとちうしり 名申

戸倉屋喜兵衛

茶出

陽乃常候之入山の林
之と也と行々叫能也
勢之流一杉之河左
月之空も右にとせし
松尾の之笑に和しゆ
川にわたり海にわたり
乃出を振る年と利

乃

乃

正古三句乃乃乃乃

集

挑鏡

水乃音

挑雲

百五

吐

吏史造

七部披

華

正花

白牛

去來湖東回卷 全

145

